

徹底解説

菅原伝授手習鑑



コラム

菅原道真と昌泰の変

菅原道真は、少年の頃から詩作に優れ、その識見と博學により、当時日の出の勢いであった藤原北家に対抗しうる存在として、宇多天皇の期待を背負い、天皇親政の「寛平の治」の推進に貢献し、その家格としては異例の出世を遂げます。宇多天皇が譲位し（宇多法皇）、醍醐天皇の御代になった昌泰二年（八九九）、右大臣となり、年若くして左大臣となつた北家の継承者、藤原時平と相対します。昌泰四年（九〇一）、時平らの策謀で、道真が帝を退位させ、娘婿でもある齊（齋）世親王を立てようとしているという風説が流れ、一月二十五日、醍醐天皇の宣命によって道真は大宰府外郎に降格されまゝ、荒廢した大宰府は老いた道真には過酷な環境だったことと思われまゝ。配所にて都での思い出を偲び詠んだ「九月十日」を掲げまゝ。

去年の今夜 清涼に待す 秋思の詩篇 独り断腸
恩賜の御衣 今此に在り 捧持して毎日 余香を拜す

（原文は漢詩）

配流二年を経て延喜三年（九〇三）、心身ともに憔悴した道真は失意のうちに生涯を終えます。逝去した道真は「天満大自在天神」として祀られます。一方、都の疫病、時平とその縁者の相次ぐ夭折、清涼殿落雷事件（延長八年（九三〇））などから、道真怨霊説が流布します。それを鎮めるためにかねてより祀られていた火雷神を北野天満宮として天曆元年（九四七）に造営され、また道真が葬られた大宰府の安楽寺廟に延喜十九年（九一九）社殿が造営され、のちの太宰府天満宮となります。時代が下ると天神信仰から怨霊としての道真の姿が薄らぎ、平和な江戸時代が到来すると天満宮は学問の神としての信仰が確立するのです。



東帯天神

湯島天満宮 蔵

令和5年5月・9月文楽公演

文楽 通し 菅原伝授手習鑑

人形浄瑠璃

第一部 午前10時45分開演
（午後1時30分終演予定）

【初段】
大内の段
加茂堤の段
筆法伝授の段
築地の段

第二部 午後2時開演
（午後5時15分終演予定）

【二段目】
道行詞の甘替
安井汐待の段
杖折檻の段
東天紅の段
宿禰太郎詮議の段
承相名残の段

【三段目】
車曳の段
茶筌酒の段
喧嘩の段
訴訟の段
桜丸切腹の段

【四段目】
天拝山の段
北嵯峨の段
寺入りの段
寺子屋の段

【五段目】
大内天変の段

5月11日(木)ー30日(火)

※18日(木)は休演

ご観劇料(各部・税込)
1等席 8,000円 / 2等席 7,000円
学生 1等席 5,600円 / 2等席 4,900円
※障害者の方は割引あり(他の割引との併用不可)

予約開始=4月14日(金) 午前10時
窓口販売開始=4月15日(土)

8月31日(木)ー9月24日(日)

※7日(木)、15日(金)は休演

※料金・発売日等は追ってお知らせいたします。

主催：独立行政法人日本芸術文化振興会

【電話】国立劇場チケットセンター [午前10時～午後6時]
0570 (07) 9900 03 (3230) 3000 [一部IP電話等]
【インターネット】国立劇場チケットセンター [検索](#)



National Theatre - Tokyo Presents
Sugawaradenju Tenarai Kagami
May 11-30, and August 31-September 24, 2023



菅原伝授手習鑑特設サイト
最新情報はこちらをご覧ください



より詳しく知りたい方はこちら

文化デジタルライブラリー 菅原伝授手習鑑 [検索](#)



東京・半蔵門
国立劇場 小劇場
〒102-8656 千代田区準町4-1
03-3265-7411(代表)
<https://www.ntj.jac.go.jp/>

未来へつなく
国立劇場
プロジェクト

初代国立劇場
さよなら公演

東京・半蔵門
国立劇場 小劇場

初段

醍醐天皇の御代、名高い学者で右大臣の菅原道真（菅丞相）と左大臣・藤原時平が政権を担いますが、唐僧の参内を契機に、ひそかに帝位篡奪を目論む時平と菅丞相との牽制が繰り広げられます。菅丞相の領地・佐太村の百姓・四郎九郎には三つ子の兄弟・梅丸、松丸、桜丸があり、それぞれ菅丞相、時平、齋世親王の舎人として仕えています。桜丸は主人の齋世親王と丞相の養女・苺屋姫との違い引きを取り持ちます。しかし、それが後の政変の火種となってしまいます。

帝は名筆の誉れ高い菅丞相に、優れた弟子を選んでその優れた筆法を伝授せよと命じます。武部源蔵は丞相の求めに応じ見事に詩歌を書き上げ、伝授を許されます。しかし、その後事態は急変、丞相は時平の讒言により罪に着せられます。丞相は娘の苺屋姫を後に立て齋世親王を帝位に就けようとする陰謀を企てたとされたのです。



筆法伝授の段

恭しく注連引き栄へ、常にははりし白木の机、欣然として座し給ふ、凡人ならざる御有様。――

大内の段

宮中での時平と菅丞相の左右大臣の牽制を描きます。“大序”と呼ばれ、御簾内で若手の太夫・三味線が荘重な節を演奏する形式で一大史劇の発端となります。



この神未だ人臣にまします時、菅原の道真と申し奉り、――

加茂堤の段

この物語の一つの軸となる三つ子の兄弟のそれぞれの姿を示し、また齋世親王と苺屋姫の恋を描きます。史実の親王も、道真の娘・車子を后とし、その縁戚が道真左遷の政変、昌泰の変の要因となるのです。

筆法伝授の段

初段のクライマックスにしてこの演目の題名の由来ともなる荘重な場面です。高名な文人宰相である道真が、勅命により精進潔斎して伝授に臨む気品ある姿も見どころです。

築地の段

流罪と決まった丞相の蕭然たる様、菅秀才を守護する梅丸と源蔵・戸浪夫婦の活躍が描かれます。

二段目

道行詞の甘替

桜丸が飴売りの姿に身をやつし、親王と姫を守護する一風変わった道行。悲劇の前の彩りを添えます。

安井汐待の段

丞相一行が土師の里へと移動するくだりを描いた場面。妹の立場を思いやる立田前と苺屋姫との姉妹愛、情けある輝国の計らいも垣間見えます。昭和58年大阪朝日座以来40年ぶり、東京では51年ぶりの登場です。

杖折檻の段

東天紅の段

宿禰太郎詮議の段

丞相名残の段

格調の高さでは文案の全演目の中でも屈指の場面がこの二段目、通称“道明寺”。神格化された丞相の出立が木像の奇跡とともに神秘的に描かれ、苺屋姫との別れの悲しさ、気丈な老女・覚寿の硬骨ぶり、そして悪人たちの暗躍と破滅が時におかしみをも絡めて展開します。



全段観たくなる!? すじがき&みどころ

齋世親王と苺屋姫は菅丞相との暇乞いを願います。警固役の判官代輝国の計らいで、丞相一行は土師の里にある丞相の伯母・覚寿の元に立ち寄り、姫は姉・立田前に伴われてそこへ同行することが可能になります。

苺屋姫は土師の里で養父・丞相の対面を願いますが、姫の実母である覚寿は、姫の親王との恋が丞相流罪にてつながったことを強く叱責します。一方、立田前の夫・宿禰太郎とその父・土師兵衛は時平に加担し、丞相暗殺を目論見ます。奸計渦巻く土師の里で危機に迫られた菅丞相が奇跡を起こし、苺屋姫との悲しい離別に至るのです。



丞相名残の段

道明らけき寺の名も、道明寺とて今もなほ栄へまします御神の、生けるが如き御姿、こに残れる物語。――



令和5年5月・9月文楽公演では、三大名作の一つ『菅原伝授手習鑑』を通してご覧いただけます。

上演機会が稀な“安井汐待の段”“北嵯峨の段”“大内天変の段”を含む、ここまでの本格的な通し上演は、昭和47年(1972)5月以来、実に51年ぶりです!

三段目

齋世親王の舎人桜丸と菅丞相の舎人梅丸は、時平の牛車に襲い掛かります。梅丸、桜丸と時平の舎人松丸とが対峙する内、時平が睨む眼光に梅丸と桜丸も体がすくんでしまい、襲撃は未遂に終わります。

三兄弟の父・四郎九郎は齢七十を祝され丞相から白太夫の名を拝領します。その誕生日に屋敷で賀の祝いが行われ、三兄弟の女房たちが集まります。その祝いの場にも政変が影を落とし、ついには悲劇的な結末を迎えるのです。



桜丸切腹の段

初手に桜を取らしてたべ、――定業と諦めて腹切刀渡す親、思ひ切っておりや泣かぬ。――

車曳の段

様式美に彩られた一幕。三兄弟それぞれの個性とともに、彼らが仕える主君たちの立場が政変によって影響を受ける様子が描かれます。

茶筌酒の段

喧嘩の段

老人・白太夫の姿そのままに滋味あふれる場面「佐太村」。悲劇的な最期を遂げる桜丸とそれを見送る人々の嘆きが涙を誘います。

四段目

天拝山の段

白太夫による飄逸な牛の講釈ののち、菅丞相が忠臣ゆえの憤怒により雷神の姿に変ずるスペクタクルに移行します。御霊信仰の対象である道真のイメージを投影された姿が描かれます。この場面で使われる特殊かしら「丞相」は憔悴した流人の姿と怒りに形相が一変する仕掛けが見ものです。



毛色を吟味する時は黒いが極上、それで一黒。次に直頭とは頭の見どころ、頭どはかしら、何方へも傾かずまんろくながよいさかいて、直頭と申します――



寺子屋の段

こなたは手詰め命の瀬戸際、奥には「ばつたり」首討つ音、――冥途の旅へ寺入りの、師匠は弥陀仏釈迦牟尼仏、――

北嵯峨の段

昭和47年以来51年ぶりの上演、夫・桜丸に続く八重の悲劇と次の「寺子屋」に続く伏線が敷かれます。

寺入りの段

寺子屋の段

数ある文案作品の中でも、最も優れた劇的展開で抜群の人気がある名場面「寺子屋」。源蔵夫婦の苦衷、首実検の緊迫、そして名曲で知られる“いろは送り”の哀調、見どころ聞きどころの連続です。



五段目

都が不穏な情勢となり祈禱が執り行われる宮中で、次々に怪異な現象が発生、権勢におごる時平にも襲い掛かり、事態は風雲急を告げるのです。

大内天変の段

いよいよ大団円。この段も昭和47年以来の上演で、齋世親王と菅原家の復権を描きます。史実でも宮中への落雷や時平の病死などが、道真の怨霊によるものと恐れられ、延喜23年(923)、道真は右大臣に復され、正二位を追贈されます。今年はちょうど1100年目にあたります。



――「さてこそ恨み晴れたり」と死霊は時平を庭上に、どうぞ蹴落とさしめしに――